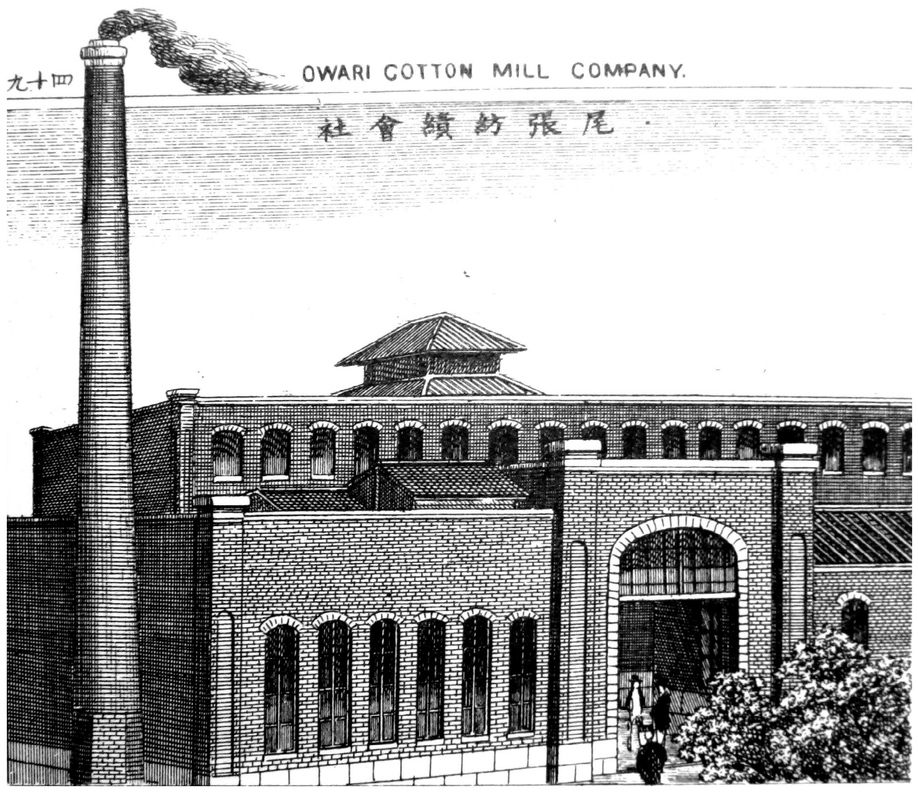
濃尾震災の被災を乗り越えて再建された尾張紡績

名古屋紡績の発展に刺激され、明治20(1887)年、奥田正香、近藤友右衛門、滝兵右衛門、森本善七等名古屋近郊出身の財界人が中心になり、尾張紡績(50万円)が創設された。社長には奥田正香が就任した。愛知郡尾頭町に工場を設け、名古屋紡績をしのぐ5300錘の洋式紡績機(ミュール紡績機、リング紡績機)を設置した。支配人には、元官営愛知紡績所長で、明治19年、同所が民間に払い下げられた後、農商務省に戻っていた岡田令高を招聘した。岡田は、尾張紡績が軌道に乗った後、明治23年、請われて紡績連合会理事に転じた。



尾頭町にあった尾張紡績会社
出典：『尾張名所図絵』

濃尾震災で被災した尾張紡績工場
出典：『本邦綿糸紡績史』

明治24年の濃尾震災では、織工の死傷者157人を出す大災害を蒙ったが、規模を拡大して工場再建をはかった。明治38年に名古屋紡績とともに三重紡績と合併した。

なお、同社は名古屋電灯に先立ち明治22年4月、名古屋の街に初の電灯を灯している。

奥田正香（1847～1921）～名古屋の渋沢栄一と言われた事業家～

尾張藩士奥田主馬の子として生まれる。維新後、官界に入ったが、明治5(1872)年官を辞し味噌醤油販売業に転じ、7年、奥田新田を拓いて財をなした。愛知県会議員(明治13年～21年)、名古屋区会議員を経て実業界で活躍し、名古屋商業会議所の会頭を20年以上務めたほか、尾張紡績、日本車輌製造、明治銀行、名古屋電力、名古屋瓦斯、朝鮮起業などを創設して社長や頭取を務め、名古屋の渋沢栄一と言われた。大正2年、稲永事件に関連して実業界を引退、大正10年74歳で逝去した。明治44年に藍綬褒章受章。

奥田正香
出典：『社史東邦瓦斯株式会社』